

地球生態系の中の「人」と「食」

企画委員 下谷 栄治
(青森県三沢市)

先日カワヨグリーン牧場がNHK青森で紹介されていました。動物担当の種市さんが女性リポーターと一人の子供に対し優しく牛の生態や世話の仕方について説明されていました。種市さんのしっかりした説明と柔和な顔つきは、正しく「生き物を慈しみ、それを食料としていることへの感謝の心」の持ち主であることを伺わせるに十分でした。

私は残念乍ら今年の「おいらせふれあい牧場デー」には参加できませんでした。宮崎市を拠点として、あの「口蹄疫」で翻弄された川南町を通過して北隣の都農町に出向いてきました。畜産とは関係のない要件でしたが、道すがら各所に白い消毒剤散布の痕が確認でき、改めて事の重大さと私たち「人」と動物のかかわりについて考えさせられたことを奇縁として感謝しています。

今般、名古屋で「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」が有りました。近年日本を含む捕鯨国に対してオーストラリアを急先鋒とする国際的な非難がクローズアップされています。一方で、種類によっては鯨が増えすぎ、魚資源が歪んできているようです。そのオーストラリアではカンガルーなどが保護の下に増えすぎて人命や農産物が脅かされています。一方で自分たちの生態系を無視した生物保護のあり方に誤りを認め、自らの手で葬ってきた天敵を今度は移入させようとしています。翻って日本国内でも猿や鹿で同様の現象が起きています。また、琵琶湖などでは外来生物繁殖による在来種絶滅が危惧されています。ワシントン条約の意味を知っているにも関わらず、輸入してまで希少動物を飼って癒しを求め、挙げ句の果て飼いきれずに自然界に放り出しています。本来日本には居ないパンダを中国政府に媚びてまでも生活環境の異なる日本の動物園に譲り受け、見せ物にして居ます。

私は専門家ではありません。ですからこうあるべきだ、こうした方が良い等と言える立場ではありません。しかし、自身地球生態系の中にある「人」の一個体として私は次のことに疑問を感じざるを得ないでいます。

生態系の一部を構成する「人」も生きるための最小限の餌(食料)として食物連鎖を踏まえ、他の動物就中「鯨」を捕食しては駄目なのだろうか。オーストラリア人は、高等ほ乳類と言われる鯨やイルカと自身が毎日人工繁殖させて毎日屠殺して主要な食料とし、外貨獲得の手段として輸出までしている大量の牛や羊との間に命の重みに違いがあるとでも主張するので

あろうか。人為に種の保存をしているから自然界の鯨やイルカとは判断基準は異なるとでも言うのであろうか。

一方で、日本人は世界中に栄養失調者や餓死者が絶えない現実を知っているにも関わらず、グルメ(gourmet)と称してトリュフ、キャビア、フォアグラを求め、産地偽装をしてまで鰻等を輸入して飽食を満たす必要性は何処にあるのだろうか。日本人は食料自給率が40%程度であることを知りつつ経済的価値判断で牛や豚或いは鳥の飼料の大部分を輸入に頼っていることの危うさを感じているにも関わらず、高くても飼料や食料を国産化することに何故舵を切ろうとしないのだろうか。日本人は森や里山或いは田畑を守ることが則ち生態系を保全し、それが海洋生物を含めて「食」の安全、安定に直結していることを知っているにも関わらず、共産主義の自国では土地の私有が認められていない中国人に何故日本の森(土地)を売り、海外から水まで輸入するのだろうか。他にも上げれば切りがありません。

子供達の情操と人格形成に係る「食育」もさることながら、「国家としての食料安全保障」と「地球規模での『人』を含めた生態系のあるべき姿」さらには「環境」に焦点を当てた“大人のための「食育」”も従来に増して求められるものと考えています。因みに、生まれて此の方貧乏の私には「グルメ」や「飽食」或いは「固定資産(土地)への投機」と言う言葉は無縁なのですが。